

資料

看護学生の看護観の形成に関する文献検討

青木 亜砂子・佐々木 律子

(2019年1月9日受稿)

抄録： 本研究の目的は、看護基礎教育における看護学生の看護観の形成に関する研究動向を明らかにし、今後の教育的示唆を得ることである。

文献抽出の方法は、医学中央雑誌 Web 版を用い、「看護観」「看護教育」をキーワードに 2009～2018 年の文献について検索を行い、原著論文の絞り込みを行った。得られた文献からさらに「看護学生」を対象とした 6 文献を最終的に分析対象とした。

年次推移では、6 文献はいずれも 2015～2018 年に掲載されたものであった。また、筆頭者の所属は、すべてが看護系大学であった。抽出した文献の研究目的については、【学習体験から得た学生の看護観の明確化】【学習体験の学生の看護観形成への影響】の 2 つのカテゴリーが抽出された。

本研究の結果、看護学生の看護観の形成に向けた教育の取り組みの動向が明らかとなった。また、看護学生の看護観の形成に関する課題として、学生の実習での経験の意味づけが大切であることや全学年でどのように看護観を育成するのか教員同士が共有することが重要であると考えられた。

キーワード：看護観、看護教育、看護学生、文献検討

I. はじめに

看護基礎教育は看護者としての知識、技術、態度を修得するとともに、職業人としての態度をも育成する場であり、一人一人の学生が自らの看護観を培う場でもある。

薄井¹⁾は、看護観について「看護実践を支えるものが看護観であり、看護観は看護技術に表現され、看護の正しい発展には方法論や技術論のみならず看護観が必要であり、看護観なくして看護実践はできない」とし、看護実践における看護観の重要性を指摘している。また、長谷川ら²⁾は、看護観は「それぞれの看護者が行う看護として表現され、個人の中に取り入れられた看護における価値観、規範、態度、行動を内面化し個人の中で価値づけられたものである。すなわち、看護の学習や体験を通じて形成された価値観」であると表現している。看護者それぞれが、看護体験を通じ、看護観を変化・発展させていくものであり、看護

職は職業として社会によって形成された価値観だとしている。

看護学生の看護観については、看護学生は授業や臨地実習を通じて形成されることが既に明らかにされてる。臨地実習も含めた看護実践という学習体験は、看護観の形成に大きな影響を与え、発展させると考えられ、特に臨地実習での体験が看護観の形成に大きく影響すると言われている。前田ら³⁾は、看護学生の看護の概念「人間」「環境」「健康」「看護」が学年を経るごとにそのイメージが変化しているとし、特に「看護」のイメージは臨地実習での体験が現実的なものとしてイメージをふくらませる。臨地実習の特殊性が多くの人間関係を体験させ、そこから自己を問い直し看護観を再発見・再構築するとしている。

これら看護観の形成や変化に関する研究は看護学生を対象としたもの、看護師を対象としたものがあるが、どちらも看護観は看護実践を継続・連

続しながら発展していくということを明らかにしている。看護学生は、座学での授業から演習、臨地実習と学習の場が変化していく中で、看護とは何かを自問自答し、私生活も含めたさまざまな環境での人間関係を体験し、看護の価値観を育んでいく。この過程を4年間という看護基礎教育の中で、看護実践者としての根幹となる看護観をどのように形成していくのが、私たち看護基礎教育に携わる者の課題である。

看護技術提供の基盤に看護観の存在が不可欠であるという認識のもとに本学の基礎看護学領域においてもカリキュラム構成がなされているが、日々看護学生の看護観形成に向けての効果的な学習体験の教授方法に困難感を感じている。今回、①学生の看護観の明確化、②看護学生の看護観に影響するもの、③学生の看護観の形成に関する教育上の今後の課題という3つの視点から、看護基礎教育における看護学生の看護観の形成に向けての研究動向について文献レビューを行うことにより、今後の教育的示唆を得たい。

II. 目的

本研究の目的は、看護基礎教育における看護学生の看護観の形成に関する研究動向を明らかにし、今後の教育的示唆を得ることである。

III. 方法

1. 対象となる文献の抽出

医学中央雑誌Web版 (Ver.5) を用いて、2018年10月に2009～2018年の10年間の範囲で国内文献の検索を行った。Key wordは、「看護観」「看護教育」でand検索を行い、会議録を除く原著論文で絞り込みを行った。検索の結果、47件の文献が得られたが、このうち臨床看護師の看護観の形成について研究している文献等を除き、看護学生の看護観の形成について分析している文献6件を最終的に分析対象として選定した。

2) 分析の方法

分析対象となる6件の文献を精読し、研究の概要と研究内容(「掲載年」「研究筆頭者の所属」「研究対象」「学習体験」「研究目的」「看護観の定義」)について該当する内容を各文献から抽出し、全体を概観した。また、文献の結果や考察から明らかになった看護観、看護観に影響するもの、学生の看護観の形成に関する教育上の今後の課題について抽出し分析した。

IV. 結果

1) 文献の概要

文献の概要を表1に示す。選定された文献の掲載年は、2009～2014、2016年が0件、2015年が3件、2017年が1件、2018年が2件であった。また、研究筆頭者の所属では、6件とも看護系大学であった。文献における対象者は、看護系大学の学生を対象とした文献が5件、看護系短期大学の学生を対象としたものが1件であった。また、看護学領域別では、基礎看護学領域が3件、在宅看護学領域が2件、成人看護学領域が1件であった。学習体験としては、6件中5件が臨地実習後の看護観の形成を分析したもので、基礎看護学実習2件、成人看護学実習1件、在宅看護学実習2件であった。臨地実習の学習体験とは別に、授業の一コマに日常生活援助を受けた当事者の語りを聴く機会を設け、その体験から得た看護観を明らかにしているものが1件あった。

2) 看護観の用語の定義について

「看護観」について、用語の定義を記載している文献は6件中5件であった。各文献の用語の定義については、表2に示す。学生の看護に対する見かた、考え方、捉え方^{6) 7) 9)}とするものがほとんどであった。どのような看護を行っていききたいか⁵⁾、看護に対する中心的価値⁸⁾という定義をしている文献もあった。

3) 研究目的から見た分類

研究目的をその内容の類似性から分類した結果

表1 文献の概要

			総数6件
掲載年	2015年		3件
	2017年		1件
	2018年		2件
			※2009～2014, 2016年0件
筆頭者所属	看護系大学		6件
研究対象	看護系大学	基礎看護学領域	1年生 2件
			2年生 1件
		在宅看護学領域	4年生 2件
	看護系短期大学	成人看護学領域	3年生 1件
学習体験	各臨地実習	基礎看護学実習	2件
		成人看護学実習	1件
		在宅看護学実習	2件
	学内授業	基礎看護学領域	1件

表2 「看護観」の用語の定義

文献	看護観の定義
小田ら ⁵⁾	自分が考える看護とは何か、どんな看護を行っていきたいと考えるかについて表現される内容
柿沼ら ⁶⁾	学生が実習を通して感じた看護に関する見解
鈴木ら ⁷⁾	「日常生活援助実習」履修後の自らの看護に対する観かた、捉え方を評点した課題レポートの内容
柳沢ら ⁸⁾	看護学生が記述した看護に対する考え方や姿勢、看護に対する中心的価値の内容
石渡ら ⁹⁾	学生の看護についての見方、考え方

表3 研究目的に関する内容の分類結果

分類	研究目的の内容
学習体験から得た学生の看護観の明確化	臨床実習後に在宅看護実習を履修した学生が、実習を通してどのように看護について捉えなおしたかについて検討し、在宅看護教育における資料とすること ⁴⁾
	看護大学1年生(基礎看護学実習終了後)が記述と口述で表現する看護観の特徴を明らかにし、学生の考えや思いを引き出す教育的支援について示唆を得ること ⁵⁾
	看護学科2年次生の「日常生活援助実習」履修後の看護に対する観かた、捉え方を明らかにすること ⁷⁾
学習体験の学生の看護観形成への影響	初年次看護学生が日常生活援助を受けた当事者の語りから得た看護観を明らかにし、看護基礎教育の初年次教育への示唆を得ること ⁸⁾
	学生の看護観の形成に在宅看護論実習の体験がどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすること ⁶⁾
	周手術期実習で、ICU・HCU実習を行った学生の学びと実習経験が受け持ち患者の看護や看護観へどのように影響を及ぼしたのかを明らかにし、今後の実習での教育方法の示唆を得る ⁹⁾

を表3に示す。これらは、【学習体験から得た学生の看護観の明確化】と【学習体験の学生の看護観形成への影響】2つに分類することができた。【学習体験から得た学生の看護観の明確化】は、4件⁴⁾⁵⁾⁷⁾⁸⁾の文献が当てはまるが、基礎看護学実習終了後や在宅看護学実習終了後の学生の看護観を明らかにしようとした研究と患者当事者の語りを聞いた後の看護観の捉えを明らかにしようとした研究である。【学習体験の学生の看護観形成への影響】には、2件⁶⁾⁹⁾がみられたが、在宅看護学実習及び周手術期の実習体験が学生の看護観に与えた影響を明らかにしようとする研究であった。

4) 文献の結果や考察から明らかになった看護観

文献の中で明らかとなった看護観については表4に示す。これは、5件の文献で明らかにされていた。5件中1件は臨床実習と在宅看護実習の比較の中で明らかにしたもの、3件は1,2年次の比較的早期の段階での看護観について明らかにしたもの、1件は周手術期の実習という特殊環境での体験から看護観について明らかにしているものであった。

小田ら⁵⁾は、基礎看護学実習終了後1年生を対象として実習記録と終了後のディスカッションでの口述内容から、学生が捉えた看護観に関わる単語をテキストマイニングを用いて分析し、看護観の特徴を明らかにしていた。学生は、「患者の安全を守ることは看護の基本であり、患者の変化に気づくために視野の広さが必要であること。」「看護技術や患者の状態を判断するための根拠が重要。」「コミュニケーションをとることで患者を知り、信頼関係を築くことにつながる。」と考えているという看護観が明らかにされた。

柳沢ら⁸⁾は、1年次後期の演習科目の「生活援助技術Ⅳ」を履修した1年次の学生を対象として、日常生活援助を受けた当事者の語りを聴くという授業を展開し、終了後の課題レポートを分析したことから、【大切な存在として患者に向き合う】【患者・家族の立場に立つ】【心を届ける】【看護師に

とっていい患者にさせない】【患者の安全を守る】という看護観を抽出している。

鈴木ら⁷⁾は、「日常生活援助実習」を履修した2年次生のうち承諾が得られた学生を対象として、Kohonenの自己組織化マップを用いた分析を行った。そして【実習後初期の看護観形成】として、『いつも患者さん中心に考え看護を実施することという看護観』、『患者が元気な状態になるように援助することが今の私の看護観』というように捉えていることを明らかにしていた。

石渡ら⁹⁾はICU・HCU実習後の学びのレポートの分析し、「どのような場所においても患者を第一に考える姿勢は変わらない」「患者の生命を守るといふ看護の仕事の責任の重さを痛感した」「人として、これまで生きてきた過程と個として尊重していく大切さを痛感した」「患者の声に耳を傾け、心に寄り添う看護の大切さを感じた」「患者の不安定な状態の変化にいち早く気づける観察眼が持てる看護師になりたい」「患者の一番身近な存在である」「チームで協力」などの捉えを明らかにしていた。

綾部ら⁴⁾は、臨床実習後に在宅看護実習を履修した看護学科4年生が提出したレポート「在宅看護実習の体験から自己の看護観を再考する」を分析し、学生は、在宅看護実習で、看護とは一方的に提供するものではなく、療養者さんとその家族の意思を尊重した上に成り立つものであると実感し、[療養者に信頼される][療養者の生活を支援する]看護師になりたいという今後実施すべき看護について捉えていることを明らかにしていた。

これら明らかになった看護観については、1, 2学年次の学生を対象とした文献での看護観では、「患者の安全を守る」「患者・家族を中心にその立場に立つ」「信頼関係を築く」ことなどが共通していた。また3, 4年次の学生を対象とした文献での看護観については、「個人の尊重やチーム医療の一員としての看護師の役割」について表現されていることが共通している。

5) 文献の結果や考察から明らかになった看護観に影響する要因

文献の中で明らかとなった看護観に影響する要因については表4に示す。

小田ら⁵⁾は、印象に残った看護師の姿は、学生自身の看護モデルとなり、看護観を形成していく基盤になるとしていた。

柳沢ら⁸⁾は、学生は、当事者の語りを患者の生の声として捉え、患者の思いや状況から患者が求める看護とは何か、どうすれば患者が回復に向かう看護、生きる力を引き出す看護が行えるのかについて考え、このことは、患者の体験に根差した医療、看護を行っていく態度や、患者から学ぶ姿勢を育成する機会となっていることを指摘している。

鈴木ら⁷⁾は、臨地実習を通じて学生は、看護師の役割を目の当たりにすることで、学生の立場ではあるが看護師への理解を深めていた。また、現場イメージの具体化をすることで、看護の漠然としたイメージから看護を身近なものに感じていたと考察していた。

石渡ら⁹⁾は、ICU・HCU実習では特殊環境下における看護技術と患者を取り巻く環境や個の尊厳の理解を深めていた。これらICU・HCU実習の看護実践が看護観へ影響を及ぼしていたとし、さらに、学生が自己の看護を振り返り、自己の体験を肯定できたことが看護観の形成には重要としていた。

柿沼ら⁶⁾は、在宅看護学実習では、「その人だけのために十分な看護ができること」「個別性が高いこと」「単独訪問のための多角的な看護が求められる」という特徴があり、学生は訪問看護師の専門性の高い活躍を目のあたりにし、あこがれを持ち看護観に影響を受けていたと分析していた。

綾部ら⁴⁾は、学生は、【臨床実習の体験】【在宅看護実習の体験】を基に【訪問看護師が提供する看護】【在宅看護の場における療養者・家族の理解】【訪問看護の専門性】【継続看護の必要性】から【今

後実施すべき看護】について考えを深めていたというプロセスを明らかにしていた。

これらから、看護師の役割や専門性を目の当たりにすること、当事者の語り、臨床現場での看護実践、自己の体験を肯定的に振り返ることが学生の看護観形成に影響していると示されている。

6) 文献の結果や考察から明らかになった学生の看護観の形成に関する今後の課題

文献の結果や考察から明らかになった学生の看護観の形成に関する今後の課題については、表4に示す。

小田ら⁵⁾は、学生の表現力が乏しいと直接的経験の明確化が進まず、十分な学びが得られない可能性があるため、教員は、記録や対話による言語化を急がず、学生個々の経験を教材化する関わりが必要であるということを指摘している。

柳沢ら⁸⁾は、臨地実習以外の場で患者と出会い、純粹に患者から学ぶ体験は非常に大きな意味を持つと指摘している。

鈴木ら⁷⁾も、看護観形成については、学生のレディネスによって、言語化に至らないことも考えられるので、学生を支援する教員の力量も看護観形成に影響することが推測されるので、学生への支援に関しては、学内での学習と実践の場で体験したことを有機的に結びつけられるよう、臨床・教員と協力の下、行うことが必要である。さらに、基礎看護学領域にとどまらず、各専門領域での臨地実習後に形成される看護に対する観かた、捉え方を継時的に把握することで看護基礎教育における学生の看護観の形成のプロセスを明らかにする必要性を述べている。

石渡ら⁹⁾は、ICU・HCU実習体験後にタイムリーなフィードバックをするための意図的なカンファレンスの開催を心がけ、実習体験を受け持ち患者への看護実践に移行する支援の実施、さらに学生が自己の看護を振り返る機会を設け、看護観形成を促進できるような支援のあり方の検討が必要と指摘している。

綾部ら⁴⁾は、臨床看護実習後に在宅看護実習を実施し、その後臨床看護実習と在宅看護実習の特徴を比較する場を設けることは、看護学生にとって看護の視点をより一層深めることに繋がっていると述べている。

いずれも、学生の表現力の乏しさから、言語化に至らない懸念やタイムリーなフィードバックをするための意図的なカンファレンスの開催の必要性について指摘していた。

V. 考察

1) 看護学生の看護観の形成に関する研究の動向

選定された6件の文献は、いずれも2015～2018年に掲載されたものであった。検索は、2009～2018年の10年間の文献を検索したが、2014年以前の文献については、臨床看護師の看護観の形成を分析しているものが多く、看護学生の看護観の形成を扱っている文献は限られていた。今後は、さらにさかのぼって検索することと、臨床看護師の看護観の形成との比較において、看護学生の看護観の形成の動向を研究する必要がある。

研究の対象は、看護系大学1,2年生を対象とした基礎看護学領域での文献が3件、在宅看護学領域2件、成人看護学領域1件であったが、基礎看護学領域での研究は、初期の看護観の形成について明らかにするものであり、また、在宅看護学領域については、基礎科目、専門基礎科目、専門科目における学習の積み上げの上で学ぶ統合分野として位置づけられている。在宅看護学実習については、各領域での臨地実習の最後に行う看護師養成機関も多く、看護学生の看護観の形成の最終段階にあることや医療機関で行われている看護と患者の生活の場で展開される看護の同質性と異質性の比較のなかで行われることもあり、在宅看護学領域での看護観の形成を明らかにしていると思われる。さらに成人領域においては、ICU・HCU実習という特殊な環境下での実習体験が看護観の形成にどのように影響するのかを分析している。看

護実践という学習体験は、看護観の形成に影響を与え、発展させる³⁾ことが明らかとなっている。そのため、各実習の特徴と体験の意味を整理していくことが必要と思われる。基礎看護学領域、在宅看護学領域にとどまらず、各専門領域での臨地実習後に形成される看護観を明確化していくことで、看護基礎教育における学生の看護観の形成のプロセスが明らかになると考えられ、全学年でどのように看護観を育成するのか教員同士が共有することが重要と思われた。

学習体験としては、実習後における研究が多いが、これは、先行研究で看護学生の看護観は、臨地実習を通じて形成されることが明らかになっている¹⁰⁾ため、臨地実習後の看護観を分析する研究が多くなっていると思われる。

さらに、研究目的の分析については、【学習体験から得た学生の看護観の明確化】と【学習体験の学生の看護観形成への影響】の2つのカテゴリーに分類した。【学習体験から得た学生の看護観の明確化】では、臨床実習や当事者の語りを聴くという学習体験後に学生の看護観がどのように明らかになっているかを分析し、教育的示唆を得る目的の研究がされていること、【学習体験の学生の看護観形成への影響】では、ICUなどでの特殊環境での看護体験や病院内での実習との比較で在宅看護学実習という特殊性のある学習体験が看護観形成にどのように影響しているかを明らかにしているという研究の傾向がうかがえた。

2) 看護学生の看護観と看護観の形成に影響を及ぼしたものと課題

看護学生の看護観については、1学年、2学年次の学生を対象とした臨地実習や授業の実施後の看護観については、患者の安全を守る、患者・家族を中心にその立場に立つ、信頼関係を築くことなどが明らかとなっていた。3、4年次の学生を対象とした臨地実習後の看護観については、1、2年次で形成された看護観と同様の内容とともに、個人の尊重やチーム医療の一員としての看護師の

表4 研究対象・研究方法、明らかになった看護観、看護学生の看護観に影響を及ぼしたものの、今後の課題

文献	研究対象	研究方法	明らかになった看護観	看護学生の看護観に影響を及ぼしたものの	今後の課題
小田ら ⁵⁾	基礎看護学実習終了後1年生として、実習記録と終了後のディスカッションでの口頭内容をテキストマイニングで分析		・高頻度で出現した単語「患者」「看護」「コミュニケーション」 学生は、「患者の安全を守ることは看護の基本であり、患者の変化に気づくために視野の広げが必要であること、看護技術や患者の状態を判断するための基礎が重要、コミュニケーションをとることで患者を知り、信頼関係を築くことにつながる。」と考えていることが明らかとなった。	・印象に残った看護観の姿は、学生自身の看護モデルとなり、看護観を形成している基礎になる。	・学生の表現力が乏しいと直感的経験の明瞭化が進まず、十分な学びが得られないう可能性があるので、教員は、記録や対話による言語化を急がず、学生個々の経験を教材化する関わりが必要である。
柳沢ら ⁸⁾	1年次後期の演習科目「生活援助技術Ⅳ」で、当事者の日常生活援助を受けた体験の振り返りを履修した1年次の学生の課題レポートの分析		【大切存在として患者に向き合う】(ひとりの人間として捉え関わる。患者は家族にとっかけてかえのない存在)【患者・家族の立場に立つ】(詳細なことは目を向け、見逃さない。患者の立場に立てて考える。患者と家族をつなぐ)【心を届ける】(ケアに思いを込める。看護師の姿や言葉、タッチングを通して心を伝える。患者に届く触れまじの心を共有させたい)。(患者に代わって感じる行動)【看護師にとっていい患者にさせない】(患者に代わって感じる。患者の心を感じ取り、心を聞くよう関わる)【患者の安全を守る】(看護師の小さなミスは絶対許されない、ナースコルムの位置の確認が大車)	・学生は、当事者の振り返りを患者の生の声として捉え、患者の思いや状況から患者が求める看護観とは何か、どうすれば患者が回復に向かう看護、生きる力を引き出す看護が行えるのかについて考えていた。このことは、患者の体験に根差した医療、看護を行っていく態度や、患者から学ぶ姿勢を育成する機会となった。	・看護観形成については、学生のレディネスによって、言語化に至らないことも懸念されるので、学生を支援する教員の力量も看護観形成に影響することが推測されるので、学生への支援に関しては、学内での学習と実践の場で体験したことを有機的に結びつけることを学生の状況によって、学習効果を上げるために臨床・教員と協力の下、行うことが必要。
鈴木ら ⁷⁾	「日常生活援助実習」を履修した2年次生の課題レポートの分析		・【実習後初期の看護観形成】として、「いつも思ってた以上に看護を実践することとこの看護観」「患者が不安な状態になるように援助することとが今の私の看護観」	・臨床実習を通じて学生は、看護師の役割を目的の当たり前にすることで、学生の立場はあるが看護師への理解を深めていた。また、現場イメージの具体化をすることで、看護の漠然としたイメージから看護を身近なものに感じていた。	・臨床実習以外の場で患者と出会う、純粋に患者から学ぶ体験は非常に大きな意味を持つと考ええる。
石澤ら ⁹⁾	A型開大看護学科3年生でICU・HCU実習後の学びのレポートの分析		・どのような場所においても患者を第二に考える姿勢は変わらないうことが分かった。 ・患者の生命を守るという看護の仕事の重さを痛感した ・「人」として、これまで生きてきた過程と「関」として尊重していく大切さを痛感した ・患者の不安定な状態の変化にいち早く気づける観察眼が持てる看護師になりたいと思った ・患者の一番身近な存在である看護師という仕事に魅力を感じた ・チームで協力しているが、カンファレンスでの看護師の言葉は胸に響いた	・ICU・HCU実習体験後にタイムリーなフィードバックをするための意図的なカンファレンスの開催を心がけ、実習体験を受け持ち患者への看護実践に移行する支援の実施、さらに学生が自己の看護観を振り返り学ぶ機会を設け、看護観形成を促進できるように支援のあり方の検討が必要。	
柳沢ら ⁶⁾	すべての実習が終了した4年生の学生が自分の看護観をテーマとして提出したレポートを分析		○学生は訪問看護の専門性の高い活躍を目のあたりにしあこがれを持ち看護観に影響を受けた。 ・「在宅看護の特長」として、①その人だけのために十分な看護ができること②専門性が高いこと③単独訪問のための多角的な看護が求められること④訪問看護師として、①訪問看護師に持つ尊敬と強いあこがれを抱いた②自分の思う看護観の集大成を見ることができた③訪問看護師の利用者をむかえたいと思う心に感動を受けた④在宅は生命の力が湧き上がるのだと感じた⑤思った⑥訪問看護師の看護観やケアの姿勢に影響を受けた	・ICU・HCU実習体験後にタイムリーなフィードバックをするための意図的なカンファレンスの開催を心がけ、実習体験を受け持ち患者への看護実践に移行する支援の実施、さらに学生が自己の看護観を振り返り学ぶ機会を設け、看護観形成を促進できるように支援のあり方の検討が必要。	
柳沢ら ⁴⁾	臨床実習後に在宅看護実習を履修した看護学科4年生が提出したレポートを分析		学生は、在宅看護実習で、看護とは一方的に提供するものではなく、療養者さんとその家族の意思を尊重した上に成り立ち立つものであると実感し、今後「療養者に寄り添われる」「療養者の生活を支援する」看護師になりたいという気持ちを持つに至った。また、看護師の視点で見えていたことをチームで提供しているという感覚で、チーム医療の中で看護を行ってみたいという学びを通して、「継続看護・チーム医療の視点を持つ」という目標を見出し、	・臨床実習後の在宅看護実習を履修し、その後臨床看護実習を在宅看護実習の特徴を比較する場を設けることは、看護学生にとっ看護観の視点により一層深めることに繋がっている。	

役割にまで視野が広がっていることが伺えた。学年や各看護学領域での実習目的の違いなどにより学生の看護観に特徴がみられることから、各領域で、どのように学生の看護観を形成していくかを共有していくことが必要と思われた。

また、看護学生の看護観の形成に影響を及ぼしたのものとして、看護師の役割や専門性を目の当たりにすること、当事者の語り、臨床現場での看護実践、自己の体験を肯定的に振り返ることが挙げられていた。川島は、「看護観が明確化することによって看護や学習に意欲や自信がついていく」¹¹⁾と述べているように、看護学生の看護観を明確化することは、その後の学生自らの学習意欲の推進につながるため重要である。看護学生の看護観が、臨地実習を通じ形成されることが明らかになっているが、今川らは、看護学生の看護観形成のきっかけは「授業や学内演習」「教員の姿勢や態度」「実習時の患者の生き方」の順で多かったことを明らかにしている¹²⁾。看護専門領域の講義などにより、看護の概念的な要素を学習し、看護師と直接的に接しながら臨地実習を行うことで、現実的な看護のイメージが形成されていくことにより学生個々の看護観がもたらされると考えられる。実習前後での看護観の分析の研究がほとんどであったが、入学時、各実習前後など経時的に看護観を分析する研究が今後必要と思われた。

各文献に今後の課題として記述されていたものに、現在の学生の特徴として、学生の表現力の乏しさから、言語化に至らない懸念が記述されている。そのため、教員、実習指導者には、学生の実習経験をフィードバックする方法など実習での経験の意味づけを丁寧に行うこと、言語化するプロセスの工夫など教育方法の検討と力量形成が求められていることが示唆された。

3) 研究の限界と今後の課題

今回の研究では、分析対象となった文献が6件と少なかったため、学生の看護観の明確化やそれに影響している要因の明確化が限定されていると

思われる。そのため、研究論文の掲載期間を広げ、文献検討し看護学生の看護観形成のための看護教育に必要なことを検討していく必要がある。

VI. 結論

本研究の結果、6文献を対象として、看護学生の看護観の形成に向けた教育の取り組みの動向を明らかにした。分析した文献の掲載年の年次推移では、6文献はいずれも2015～2018年に掲載されたものであった。抽出した文献の研究目的については、【学習体験から得た学生の看護観の明確化】【学習体験の学生の看護観形成への影響】の2つのカテゴリーが抽出された。また、看護学生の看護観については、1, 2学年次の学生を対象とした看護観については、患者の安全を守る、患者・家族を中心にその立場に立つ、信頼関係を築くことなどが共通しており、3, 4年次の学生を対象とした看護観については、1, 2年次で形成された看護観と同様の内容とともに、個人の尊重やチーム医療の一員としての看護師の役割にまで視野が広がっていた。看護学生の看護観の形成に関する課題として、学生の実習での経験の意味づけが大切であることや全学年でどのように看護観を育成するのか教員同士が共有することが重要であると考えられた。

文 献

- 1) 薄井担子：科学的看護論（第3版）。日本看護協会出版会、東京、1997。
- 2) 長谷川真美、鶴田晴美、中村昌子、熊谷玲子、吉岡栄子、大澤久美枝、奥井鈴江：基礎教育における看護観形成に関する研究—基礎看護学実習Ⅱ前後の看護イメージの変化—。東都医療大学紀要、第5巻第1号：31-40、2015。
- 3) 前田ひとみ、永田まなみ、大重和代、神谷文子、杉谷かおる、野田忍、大田黒梢、西田陶子、橋本智美、松本麻子：臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響。熊本大学医療技術短期大学紀要、10：11-19、2000。

- 4) 綾部明江, 鶴見三代子, 長澤ゆかり, 富岡実穂, 山口忍: 臨地実習後に在宅看護実習を履修した看護学生の学び—実習後の「看護観の再考」に焦点を当てて—. 茨城県立医療大学紀要, 20: 103 - 111, 2015.
- 5) 小田亜希子, 武藤雅子, 小林幸恵, 石原尚美, 野田淳, 松本美和子: 看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析. 活水論文集 (看護学部編), 3: 2-21, 2015.
- 6) 柿沼直美, 長谷川直美, 今川詞子: 学生の看護観形成に在宅看護論実習が及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌, 38 (3): 242, 2015.
- 7) 鈴木秀樹, 藤本幸三: 自己組織化マップを用いた学生の看護観の検討. 東北文化学園大学看護学科紀要, 6 (1): 41-50, 2017.
- 8) 柳沢恵美, 林真理子, 小松法子, 今井淳子, 能見清子: 初年次看護学生が日常生活援助を受けた当事者の語りから得た看護観. 創価大学看護学部紀要, 3: 25-34, 2018.
- 9) 石渡智恵美, 菱刈美和子: 周手術期実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究. 帝京科学大学紀要, 14: 111-116, 2018.
- 10) 野戸結花, 川崎くみ子, 富澤登志子, 皆川智子, 山内久子: 成人看護学実習における看護観形成. 弘前大学医学部保健学科紀要, 4: 68-72, 2005.
- 11) 川島みどり: ともに考える看護論. 医学書院, 東京, 40, 1973.
- 12) 今川詢子, 長谷川真美, 岡本佐智子: 看護系短期大学卒業生の看護観に関する考察. 日本看護学会論文集33回看護教育, 207-209, 2002.

A Review of Literature Regarding the Formation of Nursing Students' Views on Nursing

AOKI Asako and SASAKI Ritsuko

Abstract: The aim of this research was to clarify trends in research on the formation of nursing students' views on nursing during basic nursing education and obtain suggestions for education in the future.

Document extraction was performed using the Web version of the Japan Medical Abstracts Society and searched the literature from 2009 to 2018 under the keywords "views on nursing" and "nursing education". From the literature identified, 6 papers targeting "nursing students" were finally included in our analysis.

In terms of annual trends, all eight papers were published between 2015 and 2018. All of the principal authors belonged to nursing colleges. For research purposes, the extracted papers were divided into two categories: "clarification of the students' views on nursing from their learning experiences" and "the influence of students' learning experiences on their views on nursing" .

The results of this research clarified the trends regarding the educational approach toward the formation of nursing students' views on nursing. In addition, the research showed that it is also important for nursing students to understand the meaning of practical training experiences as tasks related to the formation of their views on nursing studies and for faculty members to share their understanding on how to formulate views on nursing for students in all grades.

Keywords: views on Nursing, nursing education, nursing student, review of literature